

「ユダヤ人」フロイト

「フロイトとユダヤ的なもののつながりはどのようなものであったのか？」

- 19 世紀末-20 世紀初頭のウィーンとフロイト
 - 反ユダヤ主義、医学の発展
- ユダヤ人としてのフロイト
 - 民族的なアイデンティティか？ユダヤ人差別に対する反発か？
- 精神分析とユダヤ文化 (次回以降)
 - フロイト自身は、精神分析がユダヤ的学問として捉えられることを拒み、普遍的な学問とすることを願っていたとされるが.....

1.ウィーンとフロイト

1)ウィーンへの愛憎

「わたしがここに帰ってきてから三日と経っていませんが、もうウィーンというところに対する不信感に襲われています。ここで生活することは、まさしく惨めなことです。何か重苦しいものに終止符を打てる希望がもてるような雰囲気ではないのです」
(1895 年、ヴィルヘルム・フリースへの手紙)

「解放された勝利観と悲しみが非常に強く混ざり合っています。なぜかといえば、いまそこから解放された、この監獄をいまでもすごく愛しているからです」
(1938 年、亡命当日のマックス・アイティンゲンへの手紙)

→ 自分への低評価に対する不満
人一倍の名声欲

2)ウィーンのユダヤ人

1848 年以前	ユダヤ人の居住は原則禁止
1848 年	三月革命
	フランツ=ヨーゼフ 1 世即位
1850 年	ユダヤ人に対する移動制限の撤廃
	→ 全人口に対するユダヤ人 (ユダヤ教徒) 率
	1847 年 2.2 % 1910 年 8.6 %

ユダヤ人の擡頭...反ユダヤ主義の要因に

(1)メンデル・ノイグレッツェルによる分類

言語の観点から、ウィーンのユダヤ人社会を三つに分類

A.「ウィーン・ユダヤ人」

古くから定住し、言語の面でも精神面でもドイツ語世界に同化
エリート意識、特権階級意識→「東欧ユダヤ人」蔑視
経済的に裕福

B.ハンガリーのドイツ語地域、ベーメン、メーレン地方出身者

西方イディッシュ語の方言化

C.ガリツィア、ブコヴィナ、カルパート・ロシア、ジーベンビュルゲン出身者

終生イディッシュ語を使用

反面、ウィーン・ユダヤ人への同化志向も

(2)カール・ルエーガーと反ユダヤ主義

ウィーン市長（キリスト教社会党・1897-1910 年在任）

社会改革

都市インフラの整備（上下水道、電気、ガス、公共交通網）福祉、教育

反ユダヤ主義

プロパガンダとしての反ユダヤ主義

「どこへ行っても、ユダヤ人しかいない。劇場へ行っても、ユダヤ人しかいない。リンク通りへ行っても、ユダヤ人しかいない。コンサートへ行っても、ユダヤ人しかいない。舞踏会へ行っても、ユダヤ人しかいない。大学へ行っても、またユダヤ人しかいない。……われわれは、キリスト教徒が抑圧されることにたいして戦う。われわれは、かつてのキリスト教国オーストリアに代わって新しい帝国パレスチナが出現することにたいして戦う。」

「ウィーンの最後の一人のユダヤ人をプラターで見世物にする日がくることを一日千秋の思いで待っている」

「ユダヤ高利貸し」

「ユダヤ寄生虫」

金融、工業、新聞を支配するユダヤ人への反感を煽動

→大衆の心理の把握・組織化

→ヒトラーへの影響

方便としての反ユダヤ主義？

→本人の真意はともあれ、大衆への影響は否定できず

cf) グスタフ・マーラー

カトリックへの改宗

ウィーン宮廷歌劇場音楽監督（1897-1907 年）のポストを狙う

歌劇場の運営、演出、演目等への批判

高まりつつあった反ユダヤ主義も一因

3) 「医学のメッカ」ウィーン

18 世紀 ヘラルト・ファン・スヴィーテン（マリア・テレジアの侍医）

医学教育の整備

病理解剖による病因検索、検温等の導入→診断精度の飛躍的向上

19 世紀

診断学の確立（ヨーゼフ・スコダ）

咽頭鏡、胃内視鏡、血圧計、標準視力表等の開発

麻酔法の確立による外科手術の進歩（テオドール・ビルロート）

電気療法、ギブスによる治療

血液型の分類（カール・ラントシュタイナー）→輸血を伴う大手術も可能に

→反面、自然治癒力に重きを置きすぎたり、診断精度の向上に傾注しすぎたりで、
治療がおろそかになった側面も

2. ユダヤ人としてのフロイト

1) ユダヤ人としてのアイデンティティ

父のエピソード

歩道でキリスト教徒に帽子を剥ぎ取られ、「ユダヤ人、道を空ける!!」と罵倒されるが、さほど抵抗する身振りを見せず、道を譲る

→フロイトのユダヤ人としての意識を決定づける

ただし、差別（的扱い）に対する反発で、民族的なものではない？

強いユダヤ人意識の反面、ユダヤ教や伝統に対してはきわめて冷淡

「精神分析への抵抗」（1925 年）

著者は、ユダヤ人ながら、自らのユダヤの出自をいっときたりとも隠そうとしなかった。この個人的な事情が、精神分析に対する周囲の反感に一枚噛んでいるのではないだろうか。この種の論議が声高に口にされることはごく稀にしかなかったが、残念ながら、われわれはずいぶん疑い深くなっており、その事情が何の影響も及ぼさなかったはずはないと推測せざるをえない。精神分析の最初の提唱者がユダヤ人であったというのは、また単なる偶然ではないのかもしれない。精神分析への賛同を表明するには相当の覚悟が必要であり、すすんで反主流の中で孤立する運命を引き受けるだけの気概がなくてはならない。それは、他の誰にもましてユダヤ人にとって馴染みの運

命なのである。

(太寿堂真・訳 “ 全集 ” 第 18 巻、pp.336-337)

『トーテムとタブー』(1913 年)

「反ユダヤ主義にひとこと」(1938 年)

『モーセという男と一神教』(1939 年)

2) 「家父長」フロイト

自分が収集した古代エジプト、中国、ギリシア、ローマの彫像を愛し、それらに囲まれて机の前に座っている姿は、一家の守護神と一緒にいるアブラハムのようにもあった(略) フロイトの日常生活も一日、一週間、一月、一年ごとに厳密に決まっていた。午前 8 時から午後 1 時まで治療、午後 1 時から 2 時に昼食、これは一日のうちの主要な食事で手早く給仕されなければならなかった。午後 2 時から 3 時は健康のための散歩 (悪天候のときや晩年には広いアパートの中を大股で歩き回った)、それから午後 3 時から 4 時に診察、遅い夕食まで治療をし、もう一度健康のための散歩をしてから午前 1 時まで執筆した。週の予定もやはり同じように厳格に決められていた。隔週の火曜日にはブネイ・ブリットの集会、水曜日には専門家集団との集会に出席、木曜と土曜の午後には大学で講義、土曜には彼の唯一の息抜きであった 4 人タロット・ゲームをし、日曜の朝には母親を訪ねた。弟子が彼に会いたいと思ったら、約束を取り付けるか彼の決まりきった散歩コースのどこかで待てばよかった。

自分の娘たちには習いごとや勤めに出ることを禁じ、家で優雅に縫い物をしたり水彩画を描いたりピアノを弾いたりするように命じたマルクスのように、フロイトも自分の大家族を家父長的な方法で動かした。マルクスもフロイトも自分の理論を家族に当てはめなかった。フロイトは強力な母親の下に生まれた長男であり、彼と母親の 2 人が 5 人の妹たちの上に君臨していた。やがて彼の妻も服従的な役割を務めるようになる。彼女はフロイトのためにすべてのことをした。時代遅れの従者のように、彼の歯ブラシに歯磨き粉を付けることさえした。(略) フロイトの考えは子どもたちに応用されることもなかった。彼は、自分の息子たちに性について学ばせるため、かかりつけの医者のもとへ送り込んだ。彼自身の振る舞いはいつも非常に品行方正であった。

ポール・ジョンソン『ユダヤ人の歴史[近世篇] 離散した諸国で受けた栄光と迫害』石田友雄・監修、阿川尚之、池田潤、山田恵子・訳 (徳間文庫、2006 年) pp.387-388

3) ユダヤの伝統と精神分析

フロイトの例は検討する価値がある。それは彼が本質的に非常に重要な人物だということだけでなく、彼の仕事のやり方が常にユダヤ精神とユダヤ史における多くの重要な主題を反映しているがゆえにである。たしかにフロイトには最も典型的なユダヤ人だと考えられる

理由がいくつかある。といっても彼が信仰者であったわけではないし、もちろんトーラーを信じていたわけでもない。彼は、すべての宗教は妄想の寄せ集めが形をなしたものだと思っており、宗教的（およびその他の）信仰はすべて人為的なものだということを研究によって示そうとしていた。（略）

彼の子供たちは誰も改宗しなかったし非ユダヤ人とも結婚していない（息子のエルンストはシオニストになった）。フロイト自身はいつも自分をユダヤ人だと自己規定していたし、死ぬ前の 10 年間は自分はオーストリア人でもドイツ人でもなくユダヤ人であると公言していた。（略）彼の著書をヘブライ語かイディッシュ語に翻訳する際は印税を取らなかった。フロイトの伝記作家アーネスト・ジョーンズは、彼は「自分を生粋のユダヤ人だと感じており（中略）ユダヤ人ではない友人はほとんど作らなかった」と書いている。発見したことの評判が芳しくなかったとき、フロイトが足を向けた先はブネイ・ブリット（ユダヤ人互助クラブ）であった。（略）

しかし、フロイトが自分のユダヤ的背景に目を向け、そこに求めたのは慰め以上のものであった。彼にとって、ユダヤ精神は偉大な力の源泉であった。（略）しかしユダヤ人は、フロイトが大いに称えた計り知れないエネルギーという特質をもっていただけではなく、フロイトがもっと重要視した思想というものに、最高の価値をおいていた。「われわれは思想を通じて自分たちの統一性を保持してきた。これがあったからこそ、われわれは今日まで生き残ってきたのである」とフロイトは書いている。彼はユダヤ教の律法学者指導制を精神の最高の権威であると信じ、ヤブネの律法学院の創設は「わたしにとっては常に、われわれの歴史における最も重要な啓示の一つであった」と言っている。

精神分析学を突然発見したことによって起こった、医師から治癒者へというフロイトの姿勢の転向は、何か改宗に似たもの、またある種のユダヤ的性格を備えたものであった。彼は 30 代の半ばまで医学者であった。その後突如ありふれた内科治療に興味を失う。神秘的な体験は中年になるまで待たなくてはならないというのが、ユダヤの伝統であった。（略）

フロイトが宗教の創始者、あるいは偉大なる異端の開祖としての力をもっていたのは疑う余地がない。「わたしは、自分がユダヤ人であるがゆえに、他の人々にとっては知的能力を用いる際に制限となるような多くの偏見から自由なのだ」と彼は語っている。あるいはさらに、「わたしは、祖先たちが神殿を守ったときの反抗精神や情熱をすべて自分が受け継いでいて、歴史の中の偉大な瞬間のために自分の人生を捧げることができると感じたことがよくある」。（略）彼の考えによれば、アブラハムではなくてモーセこそがユダヤ教の創始者であった。彼はこの偉大なる立法者に魅了され、（略）夢を見るものであり先見者であったヨセフと自分を同一視し、さらにアレクサンドロス大王の側近の最重要メンバーの中に夢解釈の専門家がいたことを好んで指摘した。

フロイトはユダヤ教からさまざまな要素を取り入れた。彼の夢判断法は、『ゾハル』で用いられた方法とある意味で似たものだった。

（略）フロイト学説のユダヤ的な要素は、根本的に（略）モーセ的である。フロイトは宗教法に準ずるような法律の新体系を見出したいと考えていた。そこにすべての力と永遠性が備わっているべきなのである。彼の言い方によれば、「われわれは真実を手に入れている」。どんな宗教指導者もこれ以上に教条的な言い方をすることはできない。

新しい教義はより重要な二つの点でユダヤ的であった。そのトーラーともいふべき重要な文献は、フロイト自身の著作と症例記録であり、聖書と同様、神聖化された短い物語集であった。ある命題を物語によって描写する技量は、ハスイディズムで再出現した賢者たちの特徴でもあった。フロイトはそれに科学的で世俗的な地位を与えた。それが当時、そして今でもある程度フロイトが人々に及ぼす強大な力の鍵であった。(略)

第二に、フロイト学説はまずもってユダヤ人により広められ実践された教義であった。(略)

フロイトは自分の正しさを確信している点でもモーセ的であった。(略)患者たちは「使徒」であり、フロイト自身は「私生活では善良で思いやりがあったが、自分の考えを示すときは厳しく無慈悲であった」。

ジョンソン、前掲書、pp.389-396

【参考文献】

サントリー文化事業部『グスタフ・マーラー』(TBS ブリタニカ、1989年)

村山雅人『反ユダヤ主義 世紀末ウィーンの政治と文化』(講談社選書メチエ、1995年)

野村真理『ウィーンのユダヤ人——九世紀末からホロコースト前夜まで——』(お茶の水書房、1999年)

饗庭孝男ほか『ウィーン——他民族文化のフーガ』(大修館書店、2010年)